



白梅学園の先駆者たち⑭

# 樋口愛子先生

—文化の薫り高い愛情あふれる教育者—

心理学科教授 荻野 七重

樋口愛子先生は、白梅学園を今日の姿に創り上げた最大の貢献者のお一人である。

樋口先生の白梅学園との関わりは、すでにお生まれになるときから始まっていたことができる。

## 白梅学園の前身である 東京家庭学園との深い関わり

樋口先生は、一九二一(明治44)年に、当時万朝報の記者であり、後に白梅学園の前身である「東京家庭学園」を創立

された小松謙助氏の長女としてお生まれになった。

樋口先生が14歳のとき、父小松謙助氏は、自ら創設した財団法人「社会教育協会」の常任理事に就任された。

一九二五(大正14)年のことである。このとき協会の会長は阪谷芳郎男爵、理事長は穂積重遠博士であった。社会教育協会は、国家社会の将来を担う青少年の知育、人格の高揚のためには、それを政府の手にのみ委ねるのではなく、国家社会の前途を思う者達が等しく寄与する問題である、という理念に基づいて創られ、「官民協力して、我が国家社会の中堅となるべき人々の知能の啓発、人格の向上に貢

献」することを本願としている。小松謙助氏は、一九四五年(昭和20)に、穂積理事長辞任の後を継いでこの協会の理事長に就任している。社会教育協会の活動とその歴史には、多くの有名な学者、政治家、活動家が名を連ねている。樋口愛子先生ご自身がこの協会に深く関わるようになったのは、後に同協会が設立した「東京家庭学園」の開設からである。

東京家庭学園は、穂積重遠理事長を学園長として、一九四二(昭和17)年三月に東京府知事の認可を得て創設された。資料によれば、その学則第一条に「貞淑純良ナル婦徳ヲ涵養シ母性ノ聡明ヲ培ヒ将来主婦トシテ家庭生活ニ必要ナル精神的科学的教養ヲ授ケ實際的技能を十分ニ修得セシメ真個ノ日本婦人ヲ練成スル」と学園の目標が記述されている。聡明な家庭婦人を養成しようというこの目的は、時代の背景を考慮しないと、今日の私たちにとってはかなりの違和感を覚えるが、実際には穂積学園長の下で教養主義的な理念に基づくりベラルな教育内容であったことを関係者の証言や記録を通して知ることができる。家庭学園二期生の栗田道子氏はこの学園を、「新発足の希望に燃えて、師と生徒が一体となった理想の学園があつた時代の背景に誕生したと言うことは、奇蹟の様な気さえ致します」と書いておられるが、まさに白梅学園の今日に繋がる原点を

垣間見る思いである。この教職員スタッフの中に、樋口(旧姓小松)愛子先生のお名前がある。まだお若かつたもの、先生は学園のリーダーの一人であり、現在も歌い続けられている学園歌の制定にも貢献された。担当科目は「音楽及心理——小松愛子」であつた。

## 教育者としての出発点は心理学と音楽

なぜ「音楽及心理」なのであろうか。それまでの樋口先生のご経歴を学歴を中心に概観すると次のようである。その後、保育士養成等でも、音楽・芸術を重視された淵源をこの樋口先生のご経歴の中に窺い知ることができよう。

一九一七(大正6)年 東京神田錦華小学校に入学。七月に小石川林町小学校に転校。

一九一八(大正7)年 東京府立女子師範学校附属小学校(現東京学芸大学附属竹早小学校)に転入学。

一九二三(大正12)年 東京女子附属小学校を卒業し東京府立第二高等女学校(現竹早高等学校)に入学(この年九月関東大地震)。

一九二八(昭和3)年 東京府立第二高等女学校を卒業。

女子英学塾(現津田塾大学)に入学

一九三二(昭和6)年 女子英学塾の北多摩郡小平村(現小平市)移転のため寮に入る(この頃岡村雅夫についてフルートを始める)。

一九三二(昭和7)年 女子英語塾卒業。昭和高等女学校(現昭和女子大附属高校)で英語を教える。

一九三三(昭和8)年 昭和高女を退職。文部省内の舊教育振興会に勤務。

一九三五(昭和10)年 東北帝国大学法文学部(心理学専攻)入学。

一九三八(昭和13)年 東北帝国大学卒業。東京文理科大学の無給副手となる。

一九四二(昭和17)年 東京文理科大学教育相談員。社会教育協会附属教育研究所研究員嘱託。東京家庭学園講師として心理学と音楽を担当。

さらに、これまでの研究論文、発表論文等のテーマを拝見すると、この間の事情が一層よく理解される。

「音楽における創作過程の研究 絶対音聴の研究」、「女子青年の芸術に関する思考傾向第一報告・音楽について」、「絶対音聴養成の実験報告」、「個性の問題」、「Japanese people and music : a view on the relation between Japanese people and the minor mode」

ここでは詳しいことは省略したが、樋口先生の音楽家としての才能、造詣の深さは非凡なものがあつた。加えて、先生はスポーツマンでもいらつしやつた。学生時代はバレーボール部で活躍されていたことがご経歴の中に散見される。

## 白梅学園の教育理念の萌芽と確立

樋口先生は、家庭学園の講師を勤める傍ら、一九四二年から四三年にかけては協会附属教育研究所の研究員の一人として、「勤労青年と家庭教育の研究」、「戦時下の社会教育——特に勤労青少年の教育」を担当し、研究を進めていた。しかし、一九四四年四月には決戦非常措置要項なるものの発布により、東京家庭学園の授業は一時休止され、勤労女子青年練成所が強化され、指導部及心理学部が開設、教育研究所の研究も一時休止となつた。「大東亜戦局の愈々熾烈となるに及び政府に於ける決戦非常措置要項の決定により、学園もまたこれに即応し、この一年を決戦の新施設に転換することとなりました。もとより従来の学園精神が主流となつて新施設の中に継承さるべきことは申すまでもありません」という一文が残されている。その学園精神は、今もなお白梅学園の中に引き継がれている学園精神と同じ

ものではないか、それは樋口先生の中に生き続け、白梅学園中に根を下ろして行つたのではないか。そう考えると私は、当時の方々の複雑な胸の中が思いやられると同時に、歴史の重さを感じるのである。

そして、私たちは、戦時下に加えられた統制、東京大空襲、戦後の困難を経て、東京家庭学園が白梅学園へと発展していく中に、樋口愛子先生の多大な功績を見ることになる。

終戦の年、一九四五年、小松謙助氏は社会教育協会の理事長に就任、翌一九四六年に附属東京家庭学園の再建が実現した。その事業報告には、「昭和二十一年四月二十五日、付属東京家庭学園は、戦災による教育資料の欠乏、施設の不備を克服して開校、多数の志望者より一〇二名の入校式を行い、遠方よりの生徒には若葉寮を設けて、学業および生活の実際指導を行つて、新時代に即した訓育、および科学教育を施し、見学実験特殊行事を加味して民主日本の家庭婦人として遺憾ない教養を与えるよう努力しています」と書かれ、心理学界草分けである田中寛一氏を始めとし、そうそうたる教授陣が名を連ねている。その中に、樋口先生の右腕として、さらには白梅学園の思想的中心として本学を支えてこられた田中未来(文学概論・国文学)のお名前を見ることができる。

田中未来先生は後に、幼稚園から大学までの一貫教育の

構想が小松謙助氏から樋口愛子先生に受け継がれた念願であつたことを『樋口先生追悼録』の中で述べられている。

## 一貫教育への道のりと教育理念の継続

一九四二(昭和17)年 東京家庭学園創立設立

一九五〇(昭和25)年 東京家庭学園付属白梅幼稚園創立

一九五三(昭和28)年 四月 白梅保母学園創立

可  
一二月 学校法人白梅学園設立認

一九五五(昭和30)年 白梅保母学園を白梅学園保育科と

改称

一九五七(昭和32)年 白梅学園短期大学設立 保育科第

I部・II部設置認可

一九六一(昭和36)年 心理技術科第I部・II部 専攻科

保育専攻I部・II部開設

一九六四(昭和39)年 一月 杉並区馬橋4丁目より、小

平市小川町一丁目到校舎移転

三月 白梅学園高等学校開設

教養科開設

一九六六(昭和41)年 白梅保育園開園

一九八一(昭和56)年 保育科第II部、心理技術科第II部、  
一九八七(昭和62)年

保育科保育専攻第Ⅱ部募集停止  
短期大学専攻科保育専攻第Ⅰ部開設

一九八九(昭和64)年 短期大学専攻科福祉専攻開設

心理技術科を心理学科に科名変更

一九九三(平成5)年 短期大学Ⅱ部の廃止

一九九八(平成10)年 専攻科保育専攻一年課程廃止、二年課程開設

福祉援助学科開設

二〇〇五(平成17)年 白梅学園大学(子ども学部子ども

学科)設立

二〇〇六(平成18)年 教養科、専攻科保育専攻廃止

白梅学園清修中学校開設

二〇〇八(平成20)年 七月 白梅学園大学子ども学部発

達臨床学科届出済

これが白梅学園の短期大学を中心とした、今日までの学科等の存廢の流れである。樋口愛子先生は杉並、ついでは小平のキャンパスの取得に大きな貢献をされた。とりわけ杉並キャンパスは国有地であったため、財政的にも厳しい状況であった社会教育協会への貸し付けや払い下げには非常な困難が予想された。しかし、占領下にあったその当時

に、子女のピアノ教育を通じて親交があり、その教育理念にも共鳴していたGHQ軍政部高官の「ミス・小松のような立派な教育者が経営する学校に貸すように」の強力な指示により新校地を獲得できたとき、樋口先生は一九六八年に短期大学の学長に就任され、一九七三年には理事長に就任されるといふ二つの重責を担われ、その中で病を得て、一九七四年一〇月に逝去されているのであるが、敢えて今日までの学園の歴史を取り上げた。樋口先生らの理念が今日まで生き続けていることを示したいからである。

樋口先生の教育活動とその理念を誰よりも知悉していらしたのは、常に傍近くにあつて学長樋口先生を補佐し、先死亡後の約半年を学長代行に当られ、一九八三年には学長に就任された田中未来先生である。その田中先生も故人となられた。

『樋口先生追悼録』の田中未来先生のかかれたことを手がかかりとして、樋口先生の、特に教育理念をたどつてみたい。一九四六年に社会教育協会附属東京家庭学園の再建に当つて、田中先生は、「このとき小松愛子主事が苦心して打ち出された目標は、生活の科学化、社会化、および芸術化であった。生活の科学化とは、論理的な思考と客観的な視点に立つて現実の生活を再建すること、生活の社会化とは、他人に対する人間的な配慮にはじまり、環境に適應しつつ

環境に働きかけてこれを改善すること、また生活の芸術化とは、生活の中に美を発見し、美を創造することであると解釈される。またこの二つの目標は、ギリシヤ以来の真、善、美に対応すると考えられ、簡潔なことばに含められた高い理念のもとに人間の価値を実現する教育が再出発した」と説明しておられる。つけ加える余地のない、なんとも大きく素晴らしい教育目標である。私の知る樋口先生は自らこの教育目標を体現した人であった。

田中先生によれば、この教育目標を具現化したカリキュラムは、生活の科学化、社会化、芸術化を具体化したもので、家庭学園という名から想像される家政の技術的な科目は少なく、哲学、心理学、社会学、文学、音楽、生活科学などの一般教育が重視されていたという。しかし、その後、戦後の資格や技術への志向が高まる中で、教養を主体とする学園教育は敬遠され、生徒の減少が起こったこと、その中で、学園の伝統を何とか守り持ちこたえようとする努力がなされたことと述べられている。考えてみれば、まったく同じことをその後私たちは身にしみて経験してきたし、現にしている。しかし、その理念に賛同しながら、先駆者達たちのしたほどのそうした努力を今私たちがしているかどうか、正直なところ自信がないというのが本音である。

それからの五年、紆余曲折はありながら、牧野英一博士

を学園長に迎える中で、「人間尊重の精神」を踏まえた学園の建学の精神の新たな展開があった。一方、白梅幼稚園の設立を機に、樋口先生の学園の教育目標である「生活の科学化、社会化、芸術化」は幼児にも向けられ、「科学性、社会性、芸術性」を幼稚園の保育方針とすることになり、この目標は今日もお生き続けている。

学園は、樋口先生の下で、やがて白梅学園保育科の前身である白梅保母学園の開設、白梅学園短期大学の設立、保育科に加えて心理技術科の開設、教養科の開設、その間に白梅学園高等学校を開設した。その後の学園の変遷と発展は、先述したとおりであり、樋口先生を含む多くの先駆者の先生方の築いた白梅学園の教育理念と伝統は、その後には作られた新しい学科や大学の中に引き継がれている。

## 最後に

私事になるが、高円寺の古い建物に白梅学園短期大学心理技術科の助手として就任したとき、樋口愛子先生は心理学の学科長であり、社会心理学を教えていらつしやうた。そして今、本学園の教員の中で、樋口愛子先生に接することのできた残り少ないものの中で最も古い教員が私ということになり、今回の執筆を担当させていただくことに

なった。

ご子息の秋夫さん、夏夫さんの少年時の姿を拝見したこともあり、また心理学科の統計学を担当していただいていたご父君の順四郎先生にもお目にかかり、お話をする機会もあつたものの、愛子先生について知ることはあまりに少なく、先生の追悼録を参考にさせていただくことに終始した。

いまこうして改めて、愛子先生のご経歴をたどらせていただき、その偉大さ、一人の女性が教育者として全生活を打ち込んでこられた真摯な姿に新たな尊敬の念を抱いている。といいながら、そんな私の心のうちを「なにいつてるの」という愛子先生の笑顔がよぎる。樋口先生からご覧になれば、誰もが、あの田中未来先生ですら子どもなのであつたと思う。学生に対してだけではなく、教職員に対しても深い理解と共感を示された。その広いお心を良いことに、私たち(敢えて私たちといわせてほしい)は愛子先生の苦しさを十分に理解せず、甘えていたのかも知れない。これまで、先生が健康を害され、亡くなられたことに何度となく心の痛みを覚えてきた。

先生の愛された教養科はすでになく、今また心理学科が消えようとしている。

私は樋口先生に大正デモクラシーの息吹、それはおそら

く父小松謙助氏を始めとする多くの白梅学園の先駆者たちから受け継がれたものであろう、を感じていた。それが樋口先生への信頼感に繋がっていたことを最後に付け加えたい。

